
僕の毎日が変わった

ペンペンぎん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の毎日が変わった

【Nコード】

N2250X

【作者名】

ペンペンぎん

【あらすじ】

毎日同じことの繰り返し。

そう思っていた僕は変わってしまう。

まさか学校でこんなにも本当の自分がだせる日がくるなんて！

クラスの女子とこんなにも打ち解けるなんて！

ドキドキのストーリー！

僕の毎日が変わったのは遠い未来の話ではなかった！

僕が変わるちょっと前

毎日は変わらない。

いつも同じことの繰り返しだ。

ただ少し違うところはあるだろう。

だが僕にとっては同じだと思っている。

毎日毎日ずっと。

これからもずっと。

こんな僕が変わるなんて思わない。

ずっとそうだと思ってた。

これからも。

だが僕は変わってしまった。

誰が予想できただろう。

少なくとも今の僕には全く分からない。

僕、たかなしそつこ高梨奏吾は、入学してから友達がいらない。

ほしいとも思わない。

毎日登校して、授業中は寝る。

休み時間も寝る。

昼休みはひとり屋上で弁当を食べる。

午後の授業も寝る。

そしてあとは中学生の時から使っている自転車で家に帰るだけだ。

毎日同じ。

なにが楽しいのだろう。

学校はつまらない。

家の方がずっとマシだ。

家には父親がいて、母親がいて。

それに小学２年生の妹と弟もいる。

家では僕も本当の自分でいられる。

同じことを繰り返すのは退屈だ。
いつそのまま旅にでもようか。
こんな僕でも変わる日がくるのだ。
それはもう目の前まできていた。

僕が変わる日

僕、高梨奏吾は今日も学校へ行く。

何度も言うが中学生の時から使っている自転車で。

教室に行き、また寝る。

いつも通りだ。

今日もまたいつも通りに午前の授業を終えた。

弁当をもって屋上へ行く。

僕には作ってくれる人は母親しかない。

母親手作りの弁当だけはいつも違った。

今日はオムライス弁当だ。

「いっただつきまーす」

スプーンをもって、食べる。

はずだった。

僕はオムライス弁当を食べようとした瞬間何かが激突してきたのだ。

「っあー!!」

気付いた時には遅かった。

オムライス弁当は形を崩しながら宙に舞い、残酷な音をたてて地面に落ちた。

「わぁー！ー！？」

思わず僕は叫んだ。

「僕の愛するお弁当ちゃんがあ…ごめんよう…」

こんな残酷なことをしたのは誰だ!?

そう思い、僕の背後に立っている人物を見た。

そこには女の子が立っていた。

とても小さい。

多分150?もないだろう。

僕がぼーっと見ていると、その女の子が涙目にさりながら口を開いた。

「ごっ…ごめんなさいなのっ…!」

すごい勢いで頭を下げた。

いくら愛するお弁当ちゃんをダメにされたからといって、こんなに謝られているのに許さないほど僕は鬼じゃない。

多分。

「くそっ…!!…ごほんっ…いいいいいよ。顔を上げてよ。許すからね?」

「うう…なんか最初の方にくそっで本音が聞こえたよ?…うえーんっ…!」

「ちちちち違って!!本当に許すからっ…!」

「…本当に?」

「ああ。本当に」

「良かったの…」

女の子が顔を上げた。

すると、なんか見覚えある顔だった。

「あっ!」

「ん?」

「同じクラスの高梨君だよね?」

「高梨ですが…」

「なんだなんだー…失礼なことというかものー」

「ん?なんだい?」

「高梨君ってもっと暗いと思ってたの!背も高いからいつも怖いと思ってたのっ…!」

「…ですよー」

僕がクラスの人達に暗いと思われるのは自分でも分かっていた。でも恐いって…

「高梨君身長高過ぎなの…」

「仕方ない!?」

「あつ！名乗るの！私は山下明やましためいなの！明るいつて書いてめいつて読むの」

「…いい名前だ…」

「明のこと知ってた？」

「知らん」

僕は即答してやった。

「うう…ひどいつ…！」

「やつ…！ごめん」

「ふっふー！…じゃあこれから知ってよ」

「？」

「友達！よろしくね…！」

そう言つて明は手を出してきた。

「今日から友達なの！」

友達。なんだこの響きは。

僕に友達ができるのか？

この手と握手したら。

僕は照れながらその手を握った。

明は手をブンブンと振っている。

「あはは！よろしくなの」

「よ…よろしく」

僕に初めて高校での友達ができたのだ。

変わらない毎日。

ずっと同じだと思つてた。

でも今日は違った。

こんなにも輝いている。

明の手は温かった。

柔らかかった。

握手をしているとチャイムが鳴った。

「あつ！もう授業始まるの！急がなきゃ！バイバイ奏吾にい！」
明は手を離すと屋上から出ていった。

最後に「奏吾にい」って言わなかったか？
なんだそれ。

僕は笑っていた。

僕も教室に帰ろうとする。

大事なことを忘れて…

ふと思いつく。

地面に散らかるオムライス。

「…あーっ！！愛しのお弁当ちゃん！？」

僕が叫ぶと僕のおながぐろうと鳴いていた。

僕が楽しいと思った

今日もまた僕は学校へ来た。

昨日は大変だった。

明のおかげで食べられなくなったオムライス弁当を拾い集めた。
何も食べていない僕はずっとおなかが鳴っていた。

そんなこんなで大変だった昨日とはうらはらに、またいつもの今日
がきた。

教室に入る。

またいつものように寝る体勢になる。

その時、急に明るい声が聞こえてきた。

「おっはよお」

ふと顔を上げると目の前に明がいた。

「奏吾にい？おはよう」

「…あのさ、その奏吾にいつて何？」

「ん？背が高いからお兄さまなの！だから奏吾君にお兄さまを足
して奏吾にいなー！！」

「なんだそれ！背が高いからお兄さま！？わけわからん…」

「ね？いいでしょ？…はい決まりい」

「あ！？勝手に決めるな！」

「ふふーんだ！」

「やれやれ…」

「その代わり明のこと明って呼んでー！」

「…」

「うう…ひつく…うえ〜んっ！」

「わわっ分かった！ー！やめれ！」

「ひっひー」

嬉しそうに笑うと明は走ってどこかに行ってしまった。
めんどくさいやつだ。

そう思いながらも明と話すのは嫌いではなかった。
そんなことを思っていると、僕は教室が静かになっていることに気がついた。

クラスのほとんどがいるというのに静か過ぎる。

周りを見渡すとクラス全員がヒソヒソと話し始めた。

「高梨君がしゃべった!!」

「あいつ日本語話せたのか!？」

「あいつと目が合うと石になるんじゃないの!？」

みんな隠していたようだが全部聞こえてしまう。

大体、僕は普通に話すし、立派な日本人だ。

僕は人を石にする能力なんか持ってない!

誰がそんな噂をたてたのだろうか。

このままでも仕方がないので僕は口を開いた。

「あのー、何か用ですか!？」

重い空気が教室に流れる。

何秒経ったのだろう。

ようやくひとりの女子が口を開いた。

「みんな驚きすぎだし、高梨君に失礼だわ」

やっと空気が軽くなった気がした。

沈黙の中、口を開いたのは学校いちばんの金持ち生徒、筒城沙紀つじしろさきだった。

「高梨君ごめんなさいね。高梨君がしゃべったところをみんな見たことないからびっくりしちゃったみたい」

「…そうっすか」

「ふふふ。私も驚いたけどね」

筒城沙紀が話し始めると他の生徒も話しだした。

「そう!びっくりしたの!」

「ごめんね」

僕はどれだけ異世界の人間だと思われていたんだ…

少しシヨックだったが、これで誤解が解けたようなのでよしとする。

チャイムが鳴り、先生が教室に入ってきた。

今日は始まりから大変だった。

僕が楽しいと思った2

朝の騒動からは何事もなく午前中の授業が終わった。

僕は相変わらず授業中は寝ていた。

昼休みになったので僕はまた屋上へ向かった。

今日も屋上には誰もいない。

僕一人だけ。

ここは完全に僕だけの世界。

僕は母親が作ってくれた弁当を開ける。

今日の弁当は唐揚げ弁当だ。

唐揚げは大好物だ。

ついテンションが上がる。

「いっただっきまーす♪さあおいで、唐揚げちゃん♪僕の口へっ！
！」

あーんと口を開けて唐揚げを食べようとした瞬間だった。

僕が箸で持っていた唐揚げが消えた。

ほんの一瞬の出来事だった。

「！！！」

僕の隣には明がいた。

口をモゴモゴしている。

犯人は明と分かっていたが、一応聞いてみる。

「あのー、唐揚げ盗んだ？」

「ん？ぬすんでないれふよ」

明の口にはおそらく唐揚げが入っているため、何を言っているのか
分らない。

「盗んだだろ？口に何か入ってるよ？」

「ちがうのれふっ！」

「そこまで言い張るか！？だったら口に入っているものは何だ！？唐揚げだろ！！」

「これはめいのなの！」

「さあ！堪忍しろ！そんなに違うと言うのなら証拠を見せろー！」

「えゝ？なにゝ？吐き出しましょうか？うえゝ…」

「やややややめろっ！！それだけは！！」

「ふんっ！！…でももう飲み込んだの」

「え！？まじか…」

「でも本当に明は食べてないの。…こんなこと言うのも失礼かもだけれど…」

「何だ？やっぱり私がやりましたとか言うんだろ！？」

「うっん。奏吾にい、後ろ見て。なにかいるの」

「は！？」

僕はおそるおそる後ろを見る。

確かに何かがいた。

冷や汗が出てくる。

僕の後ろには女の子がいた。

「この唐揚げ絶品だわ」

そいつは口をモゴモゴさせていた。

しかも「唐揚げ」と言った。

こいつが犯人！？

僕はその子の顔を見た。

「おっ…お前は！！」

そこにいたのは同じクラスの筒城沙紀だった。

朝にお世話になった人だ。

沙紀はごくんと唐揚げを飲み込んで言った。

「もうひとつくれない？」

沙紀は学校では超有名なお嬢様だ。

登下校はいつも庶民には分からない高級な黒塗りの車を使用している。

お嬢様なのに気取っていなくって、庶民離れていないので親しみやすくて人気だ。

そんなお嬢様が僕の唐揚げを盗んだのだ。

僕の愛する唐揚げちゃんを。

「お前だったのか！僕の唐揚げを盗んだのは！！」

「あまりにも美味しそうでつい」

お嬢様に美味しそうと言われるとつい嬉しくなってしまった。

「だろ？世界一美味いだろ？なんせ僕の母が作ったのだから！！」

僕は調子にのっていた。

だがその時、幻聴が聞こえた。

「気持ち悪いわ。マザコン？あなたマザコンだったのね」

「！？」

この空間にこんな残酷なことを口にする人間などいないはずだ。聞き間違いに違いない。

「えーっと…聞こえたのは僕だけかな？あははっ」

「奏吾にい！現実逃避はやめてなの」

「現実逃避？はははっ。違うよ明。そんなこと言う人はここには誰もいないんだよ？ほら、今マザコンって言った人は手を挙げて！」

誰も手を挙げないはずだった。

だが。

沙紀が堂々と手を挙げている。

「なにか不愉快なこと言ったかしら？」

「なっ…！！」

あり得ない。

あの沙紀お嬢様が！？

信じたくない！

「黙ってないでなんとか言ったらどうなの？高梨君？」

世界が終わった。

世界の常識がくつがえった。

「奏吾にい！…明も最初はびっくりしたの。でも沙紀ねえは実はこういう子なの！」

「なんだとうー！？」

「私がただのお嬢様だとも思っただ？この世に完璧な人間なんていないわ」

「だからね、奏吾にい。沙紀ねえには気をつけてなのー！」

沙紀は固まっている僕の手から唐揚げ弁当を盗み、唐揚げを食べた。

「んん。美味しいわ」

そう言っただけ沙紀は僕の愛するお弁当ちゃんを全部食べてしまったのだ。

僕はやっとこつちの世界に戻ってきた。

「ふう。…あれ？お弁当がないぞ。あれれれ？」

「奏吾にい！それなら沙紀ねえが全部食べたの」

「え！？」

その時チャイムが鳴った。

明はバイバイと言うと急いで屋上をでていった。

沙紀は僕に空のお弁当箱を渡すと僕に言った。

「美味しかったわ。ごちそうさま。」

「まっ…待って！？僕のこの空腹はどうやって満たせばいいの！？」

「知らないわ。あなたが悪いんでしょ…そうね、そこらへんのコケでも食べたらどうかしら？」

「僕なにかした！？」

「まあ、あなたがコケを食べたとしたら全校生徒に、高梨君はコケを食べる雑種って言うわね」

「食べないよ！！」

「あなたなら平気で食べそうね。そういうわけで私は授業があるから。さよなら。雑種の高梨君」

そう言っただけ沙紀は屋上から出ていった。

開いた口がふさがらないとはまさにこのことだ。
僕は不幸だ。

お弁当を2日連続で食べていない。
もしかして明日もなのか!?

お昼休みは最悪だ。

でもなぜだろう。

少しだけ楽しいと思う僕がいる。
こんなにお腹がすいているのに。
僕はどうしてしまったのだろう。

クラスメイトと話すのがこんなに楽しいのか?
僕はめんどくさくなつて考えるのをやめた。
楽しいという感情に理由なんていらぬい。

僕も急いで屋上から出ていくのだった。
壮大にお腹を鳴らしながら。

僕が忘れたので

目覚ましに起こされ今日がまた始まった。
何故か今日は部屋が暗い。

外からザーザーと音がする。

僕は布団から出てカーテンを開けた。
どうやら今日は雨のようだ。

はあ。とため息をつき、制服に着替える。

雨の日は自転車で登校なんてしない。

歩きで学校へ行く、と僕が決めている。

だからいつもより早めに家を出なくてはならない。

身支度を済ませ、バックを持って部屋から出る。

リビングでは朝から家族の声が聞こえる。

僕は階段を降りた。

するとそれに気がついたのか、弟と妹が「あつ！」と言った。

僕は「おはよう」と挨拶をする。

すると元気な声で「おはようっ！」と、弟と妹が声を揃えて言った。

僕には弟と妹がいる。

ふたりとも小2だ。

いわゆる、双子というやつだ。

喧嘩もするが仲がよくて、いつも一緒だ。

弟は奏太^{かなた}、妹は奏音^{かなね}という。

元気がよくていたずら盛りでもある。

たまにいたずらもされるけど、僕にとっては可愛い弟と妹だ。

リビングでは母さんが奏太と奏音に朝ごはんを食べさせていた。

父親はもう会社にいつてしまったようだ。

「あら、おはよう。朝ごはんは？」

母さんに聞かれたけど、僕はいつもより早めに家を出なくてはならない。

「ごめん…急いでるんだ」

「そう。気を付けてね」

「うん。…行つてきます」

僕が言つと奏太と奏音がまた声を揃えて言つた。

「にいちちゃん行つてらっしゃあーいつ！」

「奏吾行つてらっしゃい」

「おう」

僕は家族に見送られて家を出た。

雨の日はなんて面倒なんだろう。

僕は傘をさしているが、肩が濡れてしまっている。

僕は早く歩いた。

早く学校に着きたくて。

家からしばらく歩くと、道を歩いている生徒の姿が少しずつ増えてきた。

その中で少し前を歩く、見覚えのある後ろ姿を見つけた。

歩く度に短い二つ結びがぴょんぴょんと跳ねている。

山下明だ。

僕は一瞬、声を掛けようか悩んだが、このまま知らんぷりをするのも変なので声を掛けた。

「よう」

「あつ！奏吾にい！おはよーっ！…あれ？自転車がないよ？」

「今日は雨だから」

「ふーん…雨だから…なんでなの？」

「傘さし運転厳禁みたいな」

「…えらいっ！」

朝から誉められた。

そついえば高校生になってから初めてだ。

誰かこうして登校するのは。

そうこう話しているうちに教室に着いた。

教室に入った途端、筒城沙紀が立ち塞がった。

すると他の人に聞こえないように耳元でささやいた。

「あら、ふたりで登校？青春ね。アツアツカップルね。イチヤイチヤね」

そしてニタリと笑う。

明はアタフタしながら反論する。

「ちっ…違うつ！違うつ！たまたま会っただけなの！」

「あら？そうなの？どうみてもカップルよ」

「っ！違うつて！奏吾にいはお兄ちゃんなの！」

は？

僕はいつから明の兄になったんだ？

それより、教室がざわついている。

クラスメイト達がヒソヒソと話している。

「なにあれ？」

「お兄ちゃんだつてー」

「もしかして高梨君が強制的に明に呼ばせてるとか？」

「わー…ロリコン！？」

さつきからうそばかりだ。

それに、僕はちゃんとした弟と妹がいるのに。

明はそれを聞いたのか弁解を始めた。

「みんな違つの！明がね、奏吾にいつて勝手に呼んでるだけなのお

っ！」

というか勝手に呼んでるって自覚があるならやめろよ。

「そうなんっす。明が勝手に…」

するとクラスメイト達がほっとした表情をした。

誤解は解けたようだ。

朝から沙紀の攻撃は正直キツイ。

ことの発端を起こした本人はケロッとしている。

それどころか、今にも舌打ちしそうな気がする。

沙紀はスタスタと自分の席に戻っていった。

するとチャイムが鳴り、教室に先生が入ってきて朝のホームルームが始まった。

午前中の授業も終わり、昼休みになった。

僕はいつものように屋上に行こうとした。

でもその時、大事なことを思い出した。

そう、今日は雨なのだ。

教室の窓の外を見ると空はどんよりした色で、強い雨が降っている。

朝の時よりも激しくなっている気がする。

「はあ…」

僕はため息をついた。

仕方がない。

教室で食べるしかない。

さよなら。

僕の楽しい自分だけのランチタイムよ。

僕はしぶしぶ自分の席に座り直す。

そしてお弁当を開けようとした。

だが、ない。

そっいえば…

僕は朝、母さんから弁当を受け取ったわけ？

……。

「嘘だろ……」

僕の愛するお弁当ちゃんが……

もう泣きたい気分だった。

子供のように大きな声で泣いてしまいたかった。

そんなことを考えていると、ショックすぎて頭がおかしくなってきた。

「……あはっ……あははは……」

僕は笑いだした。

きっと周りの人には不気味に思われていることだろう。

だめだ。

もう目の前が真っ暗……

「お弁当……ねえ 奏吾に一緒に食べようなの！」

魂が抜け始めた頃、明がルンルンでこっちにきた。

「あれ？どうしちゃったのかな？……奏吾に……？」

明は僕をつんつんとつついてくる。

明に話しかけられて、やっとこっちの世界に戻ってきた僕。

「……僕は今、なにを？」

「ふえ？何言ってるの？」

「ははは……」

「奏吾にいさつきからおかしいよ？」

僕は笑われるのを覚悟で明に話した。

「……お弁当ちゃん忘れたんだようー！」

明はポカーンとした後、やっぱり笑った。

「はははっ！そんなことで？」

そんなことではない。

お弁当ちゃんを僕は愛している。

反論しようとした時――。

「なんだなんだ！…一緒に明のお弁当食べようよ」

「…え！？」

「うーん…すこしならあ、分けてあげてもいいよお？」

「ほ…本当に！？」

「うんうん。食べなされ」

「でも明はそれで足りるのか？悪いよ」

「足りないよーっ！…でもさ、お弁当半分こにしたらお腹のすぎぐあいいも一緒なの！」

言っている意味がよく分からないけど、この子は天使、いや、神様だ。

「いいのか？」

「うん！奏吾にいが困ってるなら助けるの！」

「あ…ありがとうっ！神様っ！このご恩は一生忘れません！！」

「大袈裟だってー」

「とにかくありがとう！」

僕は明の優しさに涙が出そうだった。

明は自分のお弁当箱を僕の机に置いて、僕に向かい合うように座った。

「じゃーんっ！みてみてー！！」

明がお弁当を開けた。

するとー

米だ。

米だけだ。

心なしかのりたまがかかっている。

おかずは？

でも僕は恵んでもらっている身だ。

文句は言えない。

「おっ…おいしそうだな」

「…確かに美味しいよ！！でも…」
明が落ち込む。

「どどどうした!？」

「飽きたの、いつも同じなの」

「いつもこれなのか!？」

「うん…」

「…僕は実はのりたま大好きなんだ!！」

「え!？」

「食べようぜ!！」

「う…うん」

「いただきます!」

そういうと僕は明から箸を受け取って、のりたまごはんを一口。

「おいしいなーあ!」

「そ…そうなの？」

「ほら、明の弁当なんだから食べなよ」

僕はそう言って明の口に箸でのりたまごはんを運ぶ。

明はそれをぱくつと食べる。

そして「おいしい」と言うと、急にになにかを思い出したような表情をした。

「あっ!」

「明? どうしたんだ？」

「こ…これって…」

「ん？」

「あーんってやつなの!！」

「？」

「あーんしてもらっちゃったー」
しまった。

ここは学校だった。

家では当たり前のように奏太と奏音にあーんをする。
そんな感じで普通にやってしまった。

…まあいいや。

減るもんじゃないし。

明はてへへと笑っている。

いや、よくなかった。
気を抜いていた。

沙紀という悪魔がその行動を見ていたようだ。

沙紀が不吉な笑みを浮かべながら近寄ってくる。
嫌な予感がした。

「ふふふ。」ニヤリ。

「っなんだよ！」

「見ーちゃったっ」

クラスメイトに聞こえるはずなので、沙紀は小声で話している。
明は相変わらずえへへと笑っている。
頼むからどうかしてくれ。

「あなたをいじめるいいネタができたわ」

「やつ…やめてくれえ…」

僕はその場に崩れ落ちた。

それを見て沙紀の顔はさっきよりも不吉な笑みに満ちた。

「う…終わった…」

沙紀の毒舌攻撃は僕には跳ね返せない。

「ふふっ」

沙紀は悪魔のように笑うと去っていった。

今日僕はお弁当を忘れた。

そして僕は明にあーんをしてしまった。

それを沙紀に見られたから明日からいじめられるだろう。
僕としたことが…！

午後の授業が終わり、クラスメイト達が次々に帰っていく。
外はまだ雨が降っているようだ。

僕も帰ろうと、帰る支度をしていると明が来た。

「奏吾にい、明日はお弁当忘れちゃだめだよ？明日はあげないの！」

「分かった分かった！」

「うん！じゃあまたね！」

「おう」

明が手を振って教室から出ていこうとした時、僕は思い出して、明に言った。

「おいっ」

「なあにい？」

「…今日はありがとな」

「…ううん！明も楽しかったの！」

「うん…じゃあ…」

「うん！」

明は元気に教室から出ていった。

僕は明の後ろ姿に言った。

「この飯は返すからなっ」

すると明は返事をした。

「にひひーっ」

そして明は帰っていった。

その後、僕も帰っていくのだった。

家に帰ると僕に食べられることのなかったお弁当ちゃんが机に放置されていた。

それが、僕の晩ごはん。

僕が名づけられた

次の日。

僕はいつものように教室に入ると、一目散に明のところへ駆け寄った。

そして明の目の前にぼんつと唐揚げが山盛りに入った、大きなお弁当を置いた。

「…なあに？」

明がわけわからんつ！と言いたげな表情でこっちを見つめてくる。

「これ、昨日のお礼だ」

「え！？」

昨日のお弁当のことを母さんに話したら明にお礼に渡しなさいと言つて、僕に持たせたのだった。

「昨日は本当にありがとうな。助かった」
しかし僕がそう言った時にはもう！。

食べていた。

明が蓋をあけて唐揚げをパクパクと食べている。

「んー♪おいしー♪」

「渡してすぐ食べるのかい！」

「んー？」

どんどん無くなつていく唐揚げ。
早すぎる。

これはギネスに載るかもしれない記録だ。
というかありえない。

っていうか。

「本当ね！やっぱおいしいわ
なぜだ。」

沙紀も唐揚げを食べていた。

「おい…なんでお前まで食べてんだ？」

「おいしそうな匂いがしたから来てみたら、唐揚げ天国があつたの
よ」

「この唐揚げ、母さんが明の為につくつたんだ！！沙紀じゃない！
明だあつ！」

だが当の本人の明はと言うと…。

「おいしーよね」ほらほら食べて食べてなのー！」

沙紀だけではなく、他のクラスメイトにも唐揚げを薦めている。

「わぁー！いいの？」

「じゃあ私もー」

「ありがとう！」

クラスメイトが明のところに集まってくる。

そしてクラスメイト全員が唐揚げを食べるという奇妙な光景が繰り
広げられた。

そしてみんなが唐揚げを口にした瞬間！。

シーン…。

どこまでも無音。

「あ…れ…？」

なぜだろう。

唐揚げを食べたらみんなが静かになった。

なにか変な味がしたのだろうか？

でも僕が知っている限り、母さんの唐揚げは美味しい。
なぜだ。

理由を考えていたその時。

「うまつ」

「なにこれ！？美味しすぎでしょ！？」

「天下一品！？」

次々とクラスメイト達の口から出る、大絶賛の声。

「え？」

よくわからなくなってきた。

しばらくしてやっと理解できた。

理解できたところでようやく喜びが湧いてきた。

すると、話しかけられたことのないクラスメイトが話しかけてきた。

「高梨君のお母さんが作ったの？」

僕は動揺したが、すぐに答えた。

「そうだよ。いつも美味しいんだ」

「この唐揚げは嫌みとか無しに美味しいよ！」

一人のクラスメイトに答えると、他のクラスメイト達が次々に話しかけてきた。

「お前の母ちゃんすごいな！」

「うらやましいー」

「この唐揚げならいくら食べても飽きないな」

「もつと食べたーい！」

「今度、お前の家に行ってもいいか？」

なんだこれは。

高校生活初めての光景。

僕がクラスの話の中心に立っている。

しかもいい意味でだ。

こんな日が来るとは夢にも思わなかった。

しかも…

「よし！今日から高梨君は唐揚げ君だ！！」

僕に名前がついた。

普通なら嫌がる名前かもしれない。

でも僕は名付けられた嬉しさで嫌がる暇もなかった。

「唐揚げ君ー」また唐揚げちょうだいね!」

クラスメイトが笑っている。

僕もそれにつられて笑った。

みんなは最初は目を丸くしていたけれど、しばらくするとまた笑いだした。

高校生になってこんなに笑ったのは初めてかもしれない。

僕はふと明を見た。

明も笑っている。

明はこちらの視線に気がついたのか、僕に向かってにひひーと笑った。

そして。

親指を立てて口パクで「グッジョブ」と言った。

僕はその時気がついた。

僕に唐揚げ君という名前がついたのも、もとはと言えば明のおかげだ。

僕は明に口パクで「ありがとう」とお礼をした。

また明に借りができてしまった気がする。

また唐揚げでも持つてくるかな。

今度は明の為だけに。

僕はまた笑った。

こうして僕は名付けられた。

いつもと違う今日。

たまに嬉しいことがあるから、それがあつた時には嬉しさもいつもと違う。

いつも同じでもそれは嬉しさを増やしてくれる準備体操のようなものなのかもしれない。

いつも同じと思っていた僕はまた少しずつ変わっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2250x/>

僕の毎日が変わった

2011年11月17日18時49分発行